魔法少女リリカルなのは―ある鴉の兄弟の話―

イザナギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは―ある鴉の兄弟の話―

【Ｎコード】
Ｎ０１９０Ｙ

【作者名】
イザナギ

【あらすじ】
ある管理外世界で、出会いは突然訪れた。
『存在しない存在』が物語に係わったとき、物語は静かに動きはじめる……。
これは『八咫烏（ヤタガラス）』と呼ばれた、二人の兄弟の話。

ついにやっちゃった……初めましての方は初めまして、イザナギと申します。
連載二つ目作っちゃった……放り投げないように頑張ろう……

この小説は、作者自体があまり原作を見てないので、独自の解釈やストーリーの矛盾などがあるかもしれません。
あと、アニメの内容を確認しながら執筆するので、非常に亀更新になる可能性大です。

至らない点などがありましたら、容赦なく突っ込んでください。感想などもお待ちしてます。

prologue

人生とはどうして、なかなか思い通りにはならないもので

人との出会いも、なかなかに不思議なもの

ある偶然がその人の人生を定め、

人と人との出会いが、いつか語られる『物語（おとぎばなし）』の始まりとなり、

そして『物語(おとぎばなし)』が語られるのは……

……『物語(おとぎばなし)』の中ではなく、その『物語(おとぎばなし)』が終わった時。

人に未来は見通せない。

いつ、誰の話が『物語(おとぎばなし)』として人々の間に語り継がれるのか。

それはまさに、神のみぞ知り得るのかもしれない。

しかし『神さえも知らぬ存在』がその世界に現れた時

その世界はどのような『物語(おとぎばなし)』を語り始めるのだろう

世界が語り始める『物語（おとぎばなし）』

紡がれてゆくのは、誰かの人生（ものがたり）

魔法少女リリカルなのは―ある鴉の兄弟の話―

これから紡がれる『物語（おとぎばなし）』

どんな話になるのかは、神のみぞ知る

ｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

どうも、こんにちわ、作者のイザナギです。

書いちゃったよ、リリなの……他の連載どーすんだ……ｏｒｚ

まぁ投げ出さないように頑張ります……

あらすじやキーワードに書いたとおり、原作の方を確認して書いていきますので、かなりの鈍足更新になるかと思います。

皆様のお口に合うものが作れるか……それだけが心配です。

次から本編のはず……『介入物』っぽいですが、原作に準拠していきます。

途中で恋愛描写とかあったりするかもしれないので、『〇〇は俺の嫁！』という方はお気を付けください……。

今後とも、よろしくお願いします。

ではっ！

That Is A Wonder Encounter 1

この世界で『東の果ての国』、『極東の国』とも呼ばれ、かつては時の大国に『日出国(ひいずるくに)』と喧嘩を売った国、日本。

彼(か)の国において特徴的なのは、四季がはっきりしており、なおかつそのことに何かしらの感情を持つ感受性らしい。

今は六月。

一日を過ごすごとに増してゆく強い日差しと、独特の湿っぽさが混じり始めた空気を肌に感じて、ようやく季節が移りゆくのを感じる。

この時期に感じるのは……来(きた)る季節、『夏』への期待だろうか。

よくわからん。

そんな季節の移ろいの真っ只中(ただなか)に、その都市も含まれていた。

ここは海鳴市。

海辺に面し、都市化はしているものの、多くに自然を残す平穏な街。
田舎というには物が建ちすぎ、都会というにはいささか物足りない部分もあるような、そんな都市。

治安が悪いわけでもなく、かといって大々的に宣伝しているような観光地を持つわけでもない、一般的な都市といえるだろう。

『平凡な、しかし平和な街』

そんな看板（レッテル）がよく似合うこの街に、闇が降り立つ。

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」

人の目につかないような森の中。
夕焼けにしては濃すぎる赤が空を覆い、木々の葉は不気味にざわめく。

そんな不穏な雰囲気の只中に、少年がいた。
探検隊の隊員が着るような上着に、ももをむき出すほど短い短パン。
腰には道具を入れているのだろうか、ウエストポーチのようなものを付け、マントのような外套（がいとう）を羽織っている。
日本では少し変わった服装だ。

そんな、日本に不釣り合いな姿の少年が、不気味な森の中にいた。

息を乱し、腕を庇い、その手に血を滲ませながら。

「はっ……はっ……はっ……っ！！！」

少年は何かの気配に気づき、目線、そして体を、自身の左手側の茂みへと向ける。

彼が振り向くが早いか、目線の先の茂みから影が頭を出した。
眼は赤く、後ろに触手のようなものまで見える。それは明らかに、この地球で見かけるような生物の姿ではない。
そして血走ったかのごとく真紅に輝く眼は、まっすぐと――――少年へと向けられていた。

「……っ！」

その姿を確認すると、少年は腰元から小さな宝玉のような物を取り出す。
ほんとに小さい。せいぜい飴玉くらいだろうか。
とても武器になるような類の代物には見えないそれを、少年は目の前に突き出した。

不思議な光景が起こりはじめる。
飴玉のような宝玉が、輝きだした。
次には、その輝きだした宝玉を中心に、真円とこの国の言葉ではない文字の羅列が、うすい緑の光によって描き出される。

意味を持つのだろうその光の筋は、正方形も加わってさらに複雑な形へと組み上げられていく。

そう、まるで――――――魔法陣のように。

すべてが組みあがると、その魔法陣は宝玉に近づきながら円の径を縮めていく。

だが自分に対して不利なものだろうと悟ったらしい『影』が、茂みから飛び上がった。少年の用意が整う前に攻撃するつもりらしい。

実際、少年の準備も完了していなかった様子で、顔中に玉のような汗を浮かべながら歯を食いしばる。

少年にとっての幸いは、この影――――――怪物とも呼べる異形の者の足が、それほど速くなかったことだろうか。

向かってくる『怪物』に対して、魔法陣を展開しながら少年は言葉を発する。

まるで、向かってくる怪物に聞かせるためのように。

「妙(たえ)なる響き、光となれ！
赦されざる者を、封印の輪に！」

すべてを言わせまいと怪物が飛び上がるが、すでに遅かったようだ。
少年が、最後のフレーズを叫ぶ。

「――――――――――ジュエルシード、封印っ！！」

少年の叫びとほぼ同時に怪物が魔法陣のど真ん中に突っ込んだ。
衝突の瞬間、怪物も少年も、眩しい光に包まれる。

――――――――――周りの木々を照らし、小枝や木の葉を吹き揺らした激突は、怪物が跳ね返される、という形で決着がついた。
跳ね返され、地面に打ち据えられた怪物は、体の一部なのだろう肉塊のようなものをボロボロと落しながら、弱々しく必死になりながら這って逃げ出す。
その姿はまさに瀕死の状態。あとは蹴りの一発でも入れれば倒せそうな状態だったが

「……にがし……ちゃった……おいかけ……なく……ちゃ……」

少年には、今の状態では蹴りどころか立つことすらままならない様子。

手で体を支え、なんとか前に進もうとするが、言葉を発するごとに体から力が抜けていき、最後の台詞を言い切ると同時に崩れ落ちた。

先ほどまでの戦いで疲労が蓄積していたのか、魔法陣による『封印』という行為がとどめとなったのだろうか。

少年は倒れ伏すと、ピクリとも動けなくなってしまったようだ。

「（クロウはまだ……帰ってこられないはず……僕が……どうにかしなきゃ……でも……）」

少年の思いに反して、体は言うことを聞いてくれないらしい。先ほどから指の一本も動かせない状態に、彼は陥っていた。

「（可能性は……どこまでも低いけど……）」

このままでは自身が衰弱しきって、その『クロウ』という人物が彼を見つける前に彼が天国へ連れて往かれることになるだろう。

それだけはどうしても避けたかった少年は、一縷の望みにかけた最後の『悪あがき』をやってみることにした。

＞＞……誰か……僕の声を聴いて……＜＜

口も開かない疲労の中で、彼は『心』で話し始める。
誰か――――特別な存在である『誰か』の『心』に届くように。

＞＞……力を貸して……＜＜

必死に……ただ必死にその『誰か』に気づいてもらうために、少年は『心』に語り続ける。

＞＞……魔法の……力を……＜＜

しかし最後の力を振り絞ったのだろうか。生命活動は停止していないが、『心』の声さえ発せなくなった。

だが、またしても不思議なことが起った。――――――少年の体が光に包まれていく。

ほんの一瞬だけ少年を覆った光は急激に小さくなり、光に包まれた少年の体が消えた。

今、その場所には一匹の不思議な小動物が、淡い緑の光をまとって横たわっているだけだ。その光もすぐに、うすれていった。

あの少年が持っていた宝玉が、小動物のすぐそばに落ちる。
色こそ不気味な空と同じような紅色だったが、この空と違って輝きを持っていた。

「遅くなってしまったか……？」

街中の電柱の上にたたずむ影。少年のようにマントを羽織ってはいるが、少年の物は濃い茶色だったものに対し、その影が纏(まと)うのは、まさに影のごとき漆黒のマント。
フードを目深にかぶり、マントの前もあわせているので、顔も内に着ている服も分からない。

「ユーノは……大丈夫だろうか？」

不安そうな声音を隠さず漏らした影は、顔をビルの立ち並ぶ街やその傍で共存している森へ向けた。

「……兄さんも来るし、早く合流しないと」

そういって影は、闇に染まり始めた街並に向けて、跳んだ。

マントがはためくその様は、闇に向けて羽ばたいた鴉（カラス）のように見えた。

That Is A Wonder Encounter 1（後書き）

題名の英語は、アニメの直訳を疑問形じゃなくしたものです。ウザいですね。合ってるかどうか分かりません；
違ってたり、『こっちの方が良いんじゃない？』みたいなのがあれば、遠慮なくご報告ください。

ちなみにまだ第一話です。アニメに準拠しながら、ところどころにオリジナルの話を挿入する予定です。できるかはわかりません（ヲイ

ところどころに書いてある通り、作者はアニメをほぼ見たことが無いので、それを見ながらになります。
ゆえに鈍足更新です。ご了承ください。

次回は……なのはちゃんが魔法使うとこまで、かな？　そこまでで短く感じたら、次の話を含んだりするかもしれません。

ではっ！

That Is A Wonder Encounter 2

とある一軒家の二階、その一室のベッドの上で、携帯のアラームが鳴る。

おそらく目覚まし時計の代わりに使っていたのだろうか、しばらくすると、もぞもぞと布団をかき分けながら、小さな手が桃色の携帯をつかんだ。
ベッドから落としたりと手間は少しかかったがアラームを止めることには成功した様子で、そのまま携帯は布団の中へ連行される。

ゆっくりとした動作で布団から体を起こしたのは、少女だった。
ところどころ寝癖が見え、まだ眠かったのだろう、目は寝ぼけ眼になっている。

「ふわぁぁ〜〜……なんか、変な夢見ちゃった……」

未だに眠たげな顔をしながら、少女はそれだけ呟く。

この少女の名前は、『高町なのは』。この海鳴市に住み、私立小学

校『私立聖祥大学付属小学校』に通う、小学三年生。
家族構成は以下の通り。

父：高町士郎・喫茶店『喫茶翠屋』のマスター。３７歳
母：高町桃子・喫茶店『喫茶翠屋』の菓子職人（パティシエ）。３３歳
長男：高町恭也・大学一年生、剣術家。１９歳
長女：高町美由紀・私立風芽丘学園二年生。１７歳
次女：高町なのは・私立聖祥大学付属小学校三年生。９歳

……うん、ツッコミどころなんてないヨ。ホントダヨ。
年齢差がやばいなんて思ってないですヨ。ホントデスヨ。信ジテクダサイ。
殺気を感じるが気のせいだ。そうだ。

家族の仲は良好。喧嘩もほとんど無いらしい。
というか両親がバカップル過ぎて近々なのはに弟か妹が出来そうなくらいのアツアツぶりなので、少なくとも離婚とかの危機は皆無だろう。

朝食時の今も、士郎が桃子の料理の出来栄えを誉め、そのまま二人だけの空間に突入した。
こうなると一定時間イチャイチャしないと二人とも帰ってこないの

で、三兄弟のうち一人(なのは)はそんなバカップル二人を観察し、他二人の年上組は朝食をとることに専念するわけだが

「美由紀、リボンが曲がってる」
「え、ホント？」
「ほら、貸してみろ」

こっちはこっちで、ほぼ無意識の内にイチャついていた。
五人家族のうち二つのバカップルがうまれたということは、一人(なのは)が余るということで。

「（愛されてる自覚はあるんだけど……）」

こんな光景に苦笑いを浮かべながら、正直自分一人だけ浮いてる感覚がぬぐいきれないでいた少女(なのは)だった。
そして、そんな光景が似合ってしまうほど、高町一家は美男美女揃いだった。

「（……羨ましいなぁ）」

私立、というだけあって、小学校とはいってもなかなかに豪勢だ。
なんせ、専用のスクールバスを持っている。
作者の通った公立高校なんて路線バスを登校の時間帯だけ貸し切ったみたいなものだった。

僻みはこれくらいにしておいて。

なのはが元気な挨拶とともに乗り込むと、バス最後尾の座席で彼女を呼ぶ声が。

声のするほうへ目線を向ければ、紫色の髪の少女と金に近い小麦色の髪の少女がなのはを呼んで手を振っていた。

「すずかちゃん！アリサちゃん！」

親しく呼ぶのだから、友人なのだろう。
軽く朝の挨拶を交わすと、小麦色の髪の少女が一人分の席を開け、なのはを座らせる。

紫色の髪の少女が『月村すずか』、小麦色の髪の少女が『アリサ・バニングス』というらしい。
二人ともなのはの親友で、小学一年生の時からの付き合いらしく、三年間同じクラスで過ごしているという。
さらに三年生に進級した今年から同じ塾へと通うなど、さらに付き合いを深めている。

三人の少女の楽しげなおしゃべりを乗せながら、スクールバスは走

っていた。

「……将来かぁ～……」

午前中の授業が終わって、現在は昼休み。
きれいな海を一望できる絶景スポットである屋上で、先ほどの授業中、先生が口にしていた『将来』という言葉を呟きながら、なのはは母・桃子特製のタコさんウィンナーを頬張った。

ちなみにこの『タコさんウインナー』、さすがに口は無かったものの、ゴマで目を作り、頭には海苔で作ってあるらしい鉢巻までつけた力作。結構かわいい。俺も食べたいゲフンゲフン

それをなのはは一口で頬張った。おそらく量産されすぎて見慣れて

しまったのだろうか、躊躇がなかった。
口の中のタコさんを咀嚼して飲み込んだなのはは、先ほど口にした『将来』について、親友二人の話を聞いてみることにした。

「アリサちゃんとすずかちゃんは、もう結構決まってるんだよね？」

二人とも、漠然と、という言葉がつきそうな口調だったが、しっかりとした返答を返した。
アリサは両親が会社経営をしているらしく、その跡を継ぐことを第一に考えてるらしい。
すずかの場合は、機械が好きだから工学系の専門職に就きたい、とのこと。

正直、９歳小学三年生が口にするような内容に思えない気がしないでもないが、この二人は漠然としながらも、すでに将来のビジョンを持っているということになる。
……若干早すぎる気もするが。

「……そっかぁ……二人ともすごいよねぇ……」
「でも、なのはは『喫茶翠屋』の二代目じゃないの？」

三人の中で一人だけ確固としたビジョンを持たないことに落ち込んだのだろうか、力のない声でなのはが二人を誉めれば、アリサはなのはの両親が経営している『喫茶翠屋』の二代目がなのはではないのかと問いかける。
なのはは、それも将来のビジョンの一つだと答えるが、『やりたいことがまだ他にある気がするけど、それが何かがはっきりとしない』と付け足した。
特技もとりえも特にない、と話した瞬間、左から「バカチン！」と

いう怒声とともに、スライスされたレモンが飛んできて、なのはの左頬にくっつく。
投げたのはアリサで、レモンは弁当のから揚げの付け合せに入れてあったものだ。
「自分からそういうこと言うんじゃないの！」
「そうだよ！　なのはちゃんにしかできないこと、きっとあるよ！」
なのはの友人二人が、落ち込み気味だったなのはを励ます。
「だいたいあんた、理数の成績、この私よりいいじゃないの！」
アリサは先ほどのなのはの発言を掘り返し、『これで特技じゃないとはどの口が言うのだ』とばかりに、なのはの口を引っ張り始めた。
それに対してなのはは引っ張られて涙目になりながらも、文系苦手、体育も苦手と反論するも、アリサはそれを聞き入れる気配無し。
結局すずかに止められ、周りの生徒の注目を浴びていたことに気づいて、アリサもようやっと手を放す。なのはは「痛いよ、アリサちゃん！」と抗議していたが、アリサが手を放し、痛みが引くと、自分を心配してくれた二人に感謝を述べる。
アリサは真っ赤になって「は、励ましたんじゃないんだからねっ！？」なんて叫んでいたとかいないとか。
そんな様子を、周りの生徒は生暖かい目で優しく見守っていた。
「（……自分にできること……自分にしかできないこと、かぁ……）

」

空が朱色に染まり、海の近くで海鳥が鳴く。

塾に行くために公園を通る。

途中、子犬にキャンキャン吠えられて業を煮やしたアリサが「Ｂｅ　ｑｕｉｅｔ（黙りなさい）！」と怒鳴ったので、アリサという少女は短気なのだろう。

公園でアリサが見つけたという塾への近道。
コンクリートなどで舗装はしていないが、たしかに道はあった。

夕暮れということと森の中ということもあり、初夏に近いこの季節でもこの道はかなり薄暗い。
何か出てきても、正直おかしくない雰囲気もあった。

「（あれ、ここ……どこかで……）」

何とも言えない既視感を、なのはは感じる。
しかしここに来るのは初めてだ。
それなのに最近見た気がする。

ふと、思い出した。
赤い空、ざわめく木々。
その中に立つ少年。
ぶつかり、輝く何かと少年。
「（ここ、昨夜（ゆうべ）夢で見た場所……）」
『誰か』と『何か』が戦って、『何か』が逃げて『誰か』が倒れた場所。
思わず足が止まった。
友人二人に呼ばれて『大丈夫』と返し、自分にも『まさかね』と言い聞かせて、彼女は友人たちとともに前に進む。

＞＞――――――助けて＜＜
「っ！？」
しばらく抜け道を歩いていた時のことだった。
突然、頭の中で声が響いた。また足が止まってしまう。
なのはの異変に気づき、足を止める友人二人。
「なのは？」「どうしたの？」
「……今、何か聞こえなかった？」

誰かの声のような、と付け足すなのはだが、二人には聞こえなかったらしい。
しかし幻聴とも思えず、なのははあたりを見回して、声の発信源を探してみる。

＞＞――――――助けて！＜＜
「――――っ！！」

もう一度、今度は切羽詰まった声が聞こえた。
これで特定したらしい。なのはがその声の発信源と思しき場所へ駆け出す。

「たぶんっ、こっちからっ」

運動は得意ではないからか、すでに息が切れがちになっているものの、一生懸命に走る。
そして、自分の感覚だけを頼りにしばらく走っていると、道の先に何か見つけた。

――――――――小さなイタチのような生き物が、丸くなって横たわっている。

体中に怪我を負っているように見えるが、どうにか生きているらしい。耳が動くと誰かいるのか察知したらしく、どうにか顔をあげた。
かなり痛々しく弱っている姿に、なのはは優しく抱き上げた。

後ろから二人が追いつくと、なのはに抱かれた生き物を目の当たりにし、あわてはじめる。

怪我をしているから病院へ、動物だから獣医さんに、近くに獣医さんってあったっけ？

少々落ち着け、獣医さんは人だ、それをいうなら動物病院だ。
それはともかく近くの動物病院を探すことにしたが、さすがに記憶を当てにするのは少々心もとないようで、すずかの家に電話して確かめることに。
小さなイタチもどきは、その様を不安げに眺めていたが、体力の限界なのか、気絶するように再度丸くなった。

ここは、槙原動物病院。
すずかの家で調べてもらったら、ここが一番近かったらしい。
どうにか診療時間内に駆け込めたらしく、適切な処置を受け、イタチのような生き物の命に別状はないようだ。

処置をしたのは槙原病院の院長でもある、槙原　愛先生。高町家の美男美女のも劣らない美人さんだ。
彼女の話では怪我はそれほど深くないが衰弱が激しいので、長い間一人ぼっちだったのだろうとのこと。

なのはたちがしっかりお礼を述べると、やさしい母親のような笑顔を浮かべた。

アリサの見立てでは、このイタチもどきはフェレットではないかということらしい。もちろん、日本には野生のフェレットはいるわけないので、どこかのペットじゃないかという推論にたどり着く。
しかし槙原先生の見立てでは『フェレット』とは微妙に違うらしい。
それに首につけている赤い宝玉も気になるとのこと。

宝玉を手に取ろうとした瞬間、そのフェレットもどきが首を持ち上げた。
どうにか起き上がるほど元気が戻ったのかとその場の全員が安堵する中、状況がつかめないのかあたりをきょろきょろと見回すフェレットもどき。

この後、誰かを探すようにフェレットもどきが周りの人たちの顔を見比べ、なのはをしばらく見つめた後、なのはが差し出した人差し指を一なめして、また倒れた。

しばらく安静が必要との判断で翌日まで病院のほうで預かることになり、なのはたちは翌日も様子を見に来ることにして塾へと向かう。

塾でしっかりと勉強して……と言いたいところだが、今回はそれどころではなく、今日見つけたフェレットもどきについての相談を筆談でやり取りしていた。
なのはが簡単にフェレットもどきを書いて『この子どうしようか』

と問題提議。

アリサの家は庭にも部屋にも犬がいるので厳しいだろう、と。
すずかの家にも猫がいるらしく、フェレットを入れるのは危険だろうとのこと。
また、なのはの家も、喫茶店を経営してることもあってペットは原則禁止。

さぁ、フェレットもどきの明日はどっちだ！

……なんて雑談してるうちに、なのはが当てられたものの、計算を即座に解いて事なきを得た。

結局、なのはが帰宅して家族会議してみるということでこの話は落着。

帰宅後、なのはは食事の時に思い切って事情を話し、家で預かれないかと直談判することに。

結果、『籠に入れて、なのはがきちんと世話をする』という条件で許可が下りた。頼みごとや我が侭といったことをほとんど言わない

できた末っ子の初めての我が侭、ということで大目に見たのかもしれない。

なんにせよ、フェレットもどきはなのは宅で預かることになり、友人二人にもそのことを報告するとともに、翌日そのフェレットもどきを迎えに行く約束をして、一日が終わった。

……終わったはずだった。

That Is A Wonder Encounter 2（後書き）

魔法使うとこまで行かなかった……orz

だって間が悪かったんだもん！（ぇ

長くなり過ぎて、ここまでで一回切ることに。

この調子でやってったらいつまでかかることやら……

草木も眠る静寂に包まれた住宅街を、一人の少女が駆ける。

高町なのは、９歳。

なぜこんな夜中に走っているのかといえば、またあの『声』が聞こえたからだ。それも、一刻の猶予もない雰囲気を匂わせる必死な『声』が。

ゆえにいても立ってもいられず、親や兄弟の目を盗んでこうして声に導かれるまま、声の主を助けに走っていた。

走ることしばらく。

ようやく辿り着いた先は『槙原動物病院』。あの『フェレットもどき』を預けた場所。

ここに何があるのか、と思った矢先だった。

鼓膜に突き刺さるような耳鳴りが聞こえ始める。
すぐさま耳を押さえるものの、それはなのはが『声』を聴いた時、そしてそれ以前にも、昨夜見た夢の中で聞こえていた高音だった。

耳鳴りは響き続け、なのはが未だに耳から手を離せずにいると、周囲の風景、というか色彩が変わり始める。

星明りや街灯の光で青に近い黒だった夜の色が、だんだんと赤く染められていく。まるで昨夜の夢で見た、あの少年が戦っていた森のように。
辺り一帯……もしかしたら海鳴市全体が赤く染まったのかもしれない。

周囲が不気味な赤に染められると、不意に耳鳴りがやんだ。
しかしそれだけでは終わらないらしい。
なのはが手を放すとともに聞こえてきたのは、聞いたこともない『何か』の唸り声だった。

病院の中に何かいる

そう確信して中に入ろうとなのはが敷地内に足を踏み入れた瞬間、彼女の視界に何か映る。

「あれはっ！」

白い包帯を巻いた、小さい影。見たことがある。なにせ、夕暮れ時にその命を救った張本人なのだから。

しかしただ病院内から脱走したわけではないようだ。

小さい影の後ろに、不気味な影が迫っていた。
不気味な影は小さい影を追いかけていたが、どうやら鬼ごっこというわけでもないらしい。
どちらかと言えば小さい影が『襲われている』という表現がぴったりだろう。

などと言ってる間に『小さい影』フェレットもどきが避難した一本の木に、不気味な影が体当たりをした。

木がへし折られてフェレットもどきが宙に浮く。
その時フェレットもどきの目に映ったのは――――――――――――こちらに両手を伸ばした少女の姿。

どうにか折られた木を足場にジャンプ。少女、なのはの胸に飛び込む形で窮地を脱した。

「わっ！」

急に跳んできたフェレットもどきをうまく受け止めたが、尻餅をつ

いてしまった。
すぐさまフェレットもどきの様子を確認、異常が見られないのを確認して、なのはは不気味な影を見やる。
「な、なになにっ、いったい何っ！？」
日常では当然ありえない光景にしばし混乱するなのはに、追い打ちがかかる。
「き、来てくれたの……？」
胸に抱いたフェレットもどきがしゃべった。
「しゃ、しゃべったっ！？」
しゃべった。聞き間違いでもなんでもなく、ちゃんと口を動かして、人の言葉を話した。
さらに混乱して半ばフリーズしそうになったなのはだが、
「（そ、そんな場合じゃないよね）」
とりあえず自分を落ち着かせることにして、それは成功した。
が、落ち着いたところで状況は好転するはずもなく、木に突っ込んだままだった影が再び動き出す。
その双眸（そうぼう）が、少女を捉えた。
「と、とにかく逃げなきゃっ！」
少女は撤退を選択した。

先ほどから混乱しっぱなしの少女が説明を求める。しかし腕の中の話せる小動物は話を聞いているのかいないのか、『力を貸してほしい』と協力を要請しだした。
とりあえず簡単な情報くらい提供しろよ、とは思わないではないが、フェレットもどきにとっては一刻を争う話なのだろう。

少女がフェレットもどきの言葉に含められていた『資質』という部分に反応すると、小動物はようやく、簡単にだが身の上を話し始めた。

「僕は、ある探し物のためにここではない別の世界から来ました。でも、『僕たち』の力だけじゃ思いを遂げられないかもしれない……」

『彼ら』では力不足だと分かった。ゆえに、迷惑であるとはわかっていたがこの世界の『資質を持つ』人々に力を貸してもらいたい、と。

そしてその『資質』を持つのが、誰あろうこの少女、『高町なのは』なのだという。

謝礼は、必ずするとのこと。その代わりとして、このフェレットもどきの力を借りて手助けをしてほしいと。

「僕の力を……『魔法』の力を！」

「……魔法……？」

うまく状況が呑み込めなかったらしく、なのはの頭上にははてなマークが浮いている。

それはそうだろう。いきなり喋りだしたかと思えば魔法の力で手助けしてほしいと頼むフェレットもどき。人が人なら『これは夢だ』で済ませそうな内容の、まさに夢物語のような話だから。

しかしさっきも言ったが、事態は好転してはいない。

少女が状況を理解するよりも早く、『状況』が彼女を巻き込んだ。

頭上から唸り声。

見上げれば先ほどの影が急降下で襲い掛かってくる。

土煙が盛大に上がるが、落下点にはすでに少女はいなかった。

呆然と見上げていた少女の体を、黒い影が抱えてすぐそばの電柱の陰へ押し込んだのだ。

「無事か？」

電柱になのは達を押し込んだ影は、そのまま彼女たちを守るために盾になったらしい。
なのは達が顔を上げれば、その影の正体は闇色のマントだった。
マントの前がはだけて、内側に着ている白い服も見えたが、『服』というよりか『鎧』のようだった。

未だ呆然とする少女だが、抱えるフェレットもどきは特に動揺もせずに、話しかける。やはり敵が目の前なので幾分か焦っていたが。

「助かったよ！　お兄さんと連絡が取れたんだね？」
「別件で少し遅れるらしい。先に来た……その子は？」

声の質からして、まだ声変わり前の少年のようだ。よく見れば身長もなのはよりは大きい程度のように見える。
少年とフェレットもどきが二言三言かわすと、少年がなのはについての説明を求めた。

「こっちでの協力者だよ。……まだ交渉中だけど……」
「……いたんだな、ホントに」
「あ、あのっ！」
「「ん？」」

大まかな説明と意見を交換するフェレットもどきと少年の間に、なのはが割り込んだ。いい加減に放っておかれるのも困るらしい。

「あ、あなたは、誰ですか？」
「……ああ、俺は……チッ！」

少年が何か言おうとするときに、また唸り声が。どうやら影の怪物

が復活したらしい。
実は先ほどの急降下で標的を外し、顔面から突っ込んだので昏倒していたのだ。……バカだろ……。
しかしそれほど状況が良いわけじゃなく、怪物は襲い掛かる気マンマンでこちらを睨みつける。

「こいつの友達だ……注意を引き付ける。その間に！」
「わかった！」

少年がフェレットに言うが早いか、電柱のそばから離れ、怪物の目前に。

「だ、だめだよっ！　あぶないよっ！！」
「今のところはバリアジャケットを展開してるから大丈夫！　だから、僕の話を聞いて！」
「で、でもっ」
「大丈夫ですからっ！　僕たちの手伝いをしてくれれば、必ずお礼はしますからっ！」
「お礼とか、そういう場合じゃないでしょ！」

とにかく話を進めたがる小動物に、とりあえず現状における的確なツッコミをする少女。

と、いきなり爆竹を数十発鳴らしたような音が響く。
音のするほうを見てみれば、少年が何かを怪物に向けて構えていた。
少年の構えるそれは、分かりやすく例えればこの地球上に存在する『銃器』、それも両手で保持するような『アサルト・ライフル』とも呼ばれる部類と同じような外観をしていた。
最初はライフルでいうストックに肩を当て、狙いを定めていたようだが、おもむろに腰だめに持ちかえると

「……『レイン・バレット』！」

何事かを発し、そのまま引き金を引く。

ボン、という音がするとともに、無数の光弾が怪物に襲い掛かったが、怪物は怯む程度で致命傷とまではいかないらしい。

そのあと何度か少年は拡散する光弾を撃ち続けるが、さすがに怪物もあまりダメージがないと悟ったらしく、危険を覚悟で少年に突っ込んだ。

動き自体はそんなに早くないので、少年は転がるように左へ回避。怪物が向きを変える前に、ライフルのマガジンに相当する部分を取り外し、別のものに取り換えて再度セットする。

「カートリッジ、リロード」

呟くと同時にその銃器に操作を加えると、薬莢のようなものが一つ排出された。

少年は最初のようにまた肩にストックを当てる。

「『ラピッド・バースト』！」

爆竹のごとき破裂音が連なる。今度は拡散せずに一直線にいくつもの光弾が怪物へ。

だが怪物も一撃の威力がそれほど大きくはないと分かったようで、銃弾を浴びながら少年に突っ込む。少年は回避。

明らかに決定打に欠け、長期戦の様相を呈している。

「ど、どうしよう……」

身を張って囮になっている少年を心配そうに見ながら、なのはは呟く。

すると、フェレットもどきが自分の首に下げていた宝玉を差し出す。

「これを！　このままじゃ、僕たちにはあの怪物をどうにもできないんです！！」

なのはが宝玉を手に取ると、それは柔らかく光り、ほんのり暖かさを持っていた。

誰かに暖められたのではなく、内側からその熱を発しているかのように。

フェレットもどきが自分の後に続くように促す。

なのははその宝玉を握りしめると、フェレットもどきに言われたように目を閉じて心を澄ませ、フェレットもどきの後に続いた。

『我、使命を受けし者なり』

握りしめた宝玉の輝きが、さらに増した。

『契約の下、その力を解き放て』

宝玉から、心音が聞こえた気がした。

『風は空に、星は天に』

あの耳鳴りが響き渡る。

『そして不屈の心は、この胸に』

何かが、閃く。

『この手に魔法を！』

なのはが、宝玉を掲げた。

『レイジング・ハート（不屈の心）、セーット！　アーーップ！！』

宝玉から、光が満ち溢れる。

その宝玉から、声がした。

［Ｓｔａｎｄ　Ｂｙ　Ｒｅａｄｙ.　Ｓｅｔ　ｕｐ！］

機械の合成音のような声だった。

天に向けて柱が建つ。
桜色の、光の柱が。

あまりの眩しさと光景に、怪物も少年も戦闘を中断してその様子を眺めていた。
まさに『絶句』と表現できる顔をして、少年は呟く。

「なんつー……」
「なんて魔力だ……」

フェレットもどきも驚いた様子でつぶやいた。
すぐさまフェレットもどきはなのはの目前に立ち、いまだに状況をつかみ切れていない少女に話しかける。

「落ち着いてイメージして！　君の魔法の力を制御する、『魔法の杖』の姿を！　そして、君の体を守る、強い衣服の姿を！！」
「そ、そんなっ……急に言われても……えーと……えーっと……」

そらそうだ、いきなり変な力に目覚めさせられて、そしたら『魔法の杖と防護服？をイメージしろ』と言われたのだから。
それでもちゃんと考えるあたり、高町なのはという少女は真面目だった。

どうにか、その『魔法の杖』が心に浮かび上がった。あとは防護服？だけだが、これは案外すんなりと決まった。

「と、とりあえず、これでっ！！」

とりあえずって、途中で変更とかできるのか分からないのに決定していいのか？という疑問が湧くが、今のところはじっくりと考えさせてくれる余裕もないので、仕方ない。

……いわゆる『変身シーン』は割愛させてもらう。理由は目のやり場に困ったから。
しかしこのフェレットもどき、真正面から見てなかったか……？

なのはの『変身』が終わると、桃色の羽根が風に乗って流れる。
桜色の光の中でそんな幻想的な光景が繰り広げられる中、フェレットもどきが変身を終えたなのはを見て

「成功だ……！」

と呟いていたが、当の本人（なのは）はというと、

「ふえ、ふえぇぇぇ！！？？」

かなり混乱していた。

「これなに！？　なんなの！？」
「……まぁ、当然の反応だな……」

少年が状況を冷静に判断して口にする。
それが隙となった。

「……ぐっ！？」
「あっ！」
のんきに少女を見やってたものだから、怪物が振るった触手の鞭に薙ぎ払われ、コンクリートの塀にうちつけられた。
かなりの衝撃だったようで、少年が当たったところの塀はひび割れて陥没している。
邪魔はいなくなったとばかりに怪物はなのはを振り返る。
「くそっ！」
連続した破裂音。少年が怪物の背後から光弾を叩き込むが、
「がっ！」
さらに触手の追撃を受けてうずくまってしまった。
そのまま攻撃の対象をなのはに切り替えたようで、じりじりとなのはを塀まで追い詰める。
「来ます！」
「っ！！」
フェレットもどきの警告と同時に、怪物が飛び上がった。先ほどの不意打ちをもう一度、というわけなのだろうか。
怪物はそこら辺の民家より高く跳ねると、なのはに照準をロック。
猛スピードで突っ込んできた。
「きゃっ！」

おもわず、なのはは魔法の杖を盾に、と構えた。
すると、魔法の杖『レイジング・ハート』の赤い球体の部分に、文字が浮かび上がる。

［Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ］

文字の通りに機械音が喋ると、怪物となのはの間に透明な桜色のバリアが生成され、怪物を受け止めた。

１０秒もないぶつかり合いの末、屈したのは怪物のほうだった。
押し返されるエネルギーに負けたのか、体をバラバラにされながら吹き飛ばされる怪物。……弱すぎじゃね？
というほどバリアの反発力は弱いものではなかったらしく、あの怪物の体の塊が散弾のように飛び散り、コンクリートの塀や道路に突き刺さって穴ぼこにし、挙句の果てには電柱もへし折れた。
ちなみに、あの少年もなのはが使ったのと同じ魔法『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』で防御しており、怪我はなかった。

こんな現状を演出した少女、なのはは、というと、

「はぁはぁはぁはぁはぁはぁ……」

逃げていた。決して変態の息遣いではないので、あしからず。
そして腕に抱いたフェレットもどきが何か言うが、小難しすぎて今の状況じゃ理解できないのでスルーさせてもらう。
端的にまとめれば、『あれは悪い魔法のせいでできた怪物で、やっつけるには『封印』するしかない』とのこと。

「よ、よくわかんないけど、どうすればいいの？」
「さっきみたいに、攻撃魔法や防御魔法などの「話が長い！」うっ……」

フェレットもどきの話をさえぎったのは、あの少年。
十字路に入り、電灯でようやくフードに隠れていた顔が見えた。
目つきが少々悪い以外はそれほど特徴的なパーツはない。まだなのはと同世代と推測できるので、成長次第では判断できないが、顔のパーツは悪くなく、全体的に見れば整った顔立ちだ。

「こいつは物を説明すると回りくどくなるんだ。……簡単に言っていいか？」
「う、うん……」

少年から睨みつけられて少々物怖じしながらも、なのはは頷いた。
ちなみに、少年は睨み付けたわけではなくただ単に目つきが悪く誤解されやすいだけなので、あしからず。

「『封印』みたいな強力な魔法を使うには、呪文がいる」
「『呪文』……？」
「そう、呪文だ。
……心を澄ませろ。お前の呪文が、心の中に浮かんでくるはずだ」

そう言われて、なのはは目を閉じた。
少年に言われたとおり、心を澄ませる。

唸り声。復活した怪物が、なのはに向けて一直線に向かってくる。
目を閉じているなのはの横で、少年が彼の『魔法の杖』なのだろう銃を怪物に向けて構えた。

「（まだ……なのか？）」

また怪物が飛び上がり、今度は触手で攻撃を仕掛けてくる。

「くっ！」

少年が迎撃しようと構えた瞬間――――――――――なのはの目が、開いた。

そして先ほどまでの混乱がうそのように凛とした顔で、『レイジング・ハート』を構える。

攻撃や防御などの簡単な魔法は、心に願うだけで使えるという。

そして今、なのはが防御を念じたことで、『自分の意志で』防御魔法『プロテクション』が発動した。

怪物の触手は当たった瞬間ボロボロになり、その光景を見て、怪物は目を見開く。

その様を見た少年が、小さくつぶやいた。

「今度はこっちの番だ」

同時に、なのはが心の中に浮かんだ『呪文』を唱える。

「リリカル！　マジカル！」

「”封印すべきは忌まわしき器、『ジュエル・シード』”！」

フェレットもどきが、『封印すべき対象』をなのはに教える。

「『ジュエル・シード』、封印っ！」
［Ｓｅａｌｉｎｇ ｍｏｄｅ． Ｓｅｔ ｕｐ］
なのはの宣言とともに『レイジング・ハート』がセットアップを宣言する。
若干宝玉の部分が伸び、その下からスロットが解放され、桜色の魔法の翼が生成される。
大出力モード、『シーリング・モード』。強力な魔法を使用する際に用いられるモードで、たいていの『魔法の杖』の高出力体系として用いられるらしい。
その『シーリング・モード』から桜色のリボンが伸び、怪物を雁字搦めにする。
苦しそうに呻く怪物の額に『ＸＸＩ』という文字が浮かび上がる。
ローマ数字で『２１』を表す文字だ。
［Ｓｔａｎｄ ｂｙ Ｒｅａｄｙ］
「リリカルマジカル！ ジュエルシード、シリアルＮｏ，２１！
――――――封印！」
［Ｓｅａｌｉｎｇ］
なのはと『レイジング・ハート』の声が響くと同時に、さらに桜色のリボンが増え、怪物を襲う。
雁字搦めの怪物の体を十数本のリボンが貫き、怪物の体は爆発……
……するかと思いきや、塵のように消えた。
後に残ったのは、青い不思議な輝きを放つ石。そして激戦を物語る、穴だらけのコンクリート塀と道路。

なのはが石の存在に気づいた。
「これが、『ジュエルシード』です」
フェレットもどきが解説する。
「えと、この後は？」
「その『レイジング・ハート』で触れるんだ」
なのはの疑問に、少年が答えた。
言われたとおり『レイジング・ハート』をかざすと、石が浮かび上がり、『レイジング・ハート』の宝玉部分に吸い寄せられたかと思うと、その中に吸い込まれた。
［Ｒｅｃｅｉｐｔ　Ｎｏ．ＸＸＩ］
『レイジング・ハート』の独特の電子音声が響いて、『ジュエルシード』を回収したことを知らせる。
それと同時に、なのはの変身も解除され、『レイジング・ハート』も最初に渡された宝玉の形態に戻った。
「あ、あれ、終わったの……？」
今まで無我夢中だったのだろうか、急に静かになった周りを見渡しながら、なのはは呟いた。
「はい、あなたのおかげで……」
「……ありがとうな」
その呟きに、フェレットもどきと少年が返した。

「僕からも……ありが……とう」
「ちょ、ちょっと、大丈夫っ！？」
「……怪我が完治する前に動き回った影響だな……」
「そ、そんな冷静に観察してる場合だっけ！？」

フェレットもどきがまた力尽きたのと同時に……

ウーーーーーウーーーーーーファンファンファンファンファン

なにかのサイレンが聞こえてきた。
その音に、人間二人が硬直する。

「も、もしかしたら、私……ここにいたら、たいへんアレなのでは……？」
「『アレ』ってなんだよ……でも『やばい』ってのは、分かるぞ……」

引きつり気味の顔で話すなのはに、丁寧にツッコミを返す少年。
共通してるのは、『ここに留まるのはマズイ』という直感。

「で、でも……」
「……俺たちの話がこの世界じゃ夢物語並に信憑性ないのはわかってる……だから……」
「だ、『だから』？」

「逃げる！」
「ふえぇぇぇぇ！！！？」

いうが早いか少年はなのはの手をつかみ、一目散に駆け出した。もちろんフェレットもどきを小脇に挟んで。

少々罪悪感がぬぐいきれない少女は、去り際に

「と、とりあえず！　ごめんなさ〜〜い！！」

と言い残すことだけにしたが、ここに駆けつけるであろう国家公務員（たち）に伝わったかどうかは謎である。（おまわりさん）

Incantation：呪文、まじない

わざわざ英和辞典で調べてます。語彙が貧弱ですね。

さて、オリキャラが登場しましたが、名前が未だに出ていない……まぁわっかりやすい伏線張っておいたので分からない人はいないと思いますが。

題名のとおり、オリキャラ兄弟です。キャラの設定とかは考えてありますが、二人とも出てくるまで公開しません。

他に登場させるオリキャラは今のところいませんが、シリーズに一人程度は追加してみたいなぁ……（ぇ

まぁ今は一期を終わらせることに集中しますが。

慣れたらオリキャラを中心に書いていきたいなぁ……。

読了、ご苦労様でした。ありがとうございました。

次回は一期二話の後編みたいなものですかね。本編一話につき二話程度の感覚で書いていきたいです。慣れたら一話でいけるかも？

とにかく、今後とも精進していきますので、お付き合いいただけると幸いです。

それではっ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0190y/

魔法少女リリカルなのは―ある鴉の兄弟の話―

2011年11月2日14時15分発行